

# フランク 安田 — イヌイットを救う —

フランク安田（安田恭輔）は明治元（一八六八）年、医者をしていた安田家の三男として生まれました。十歳のとき、母を病気で亡くし、次の年には父も亡くしたことで、町にある船会社で働いて暮らすことになりました。恭輔は、船員たちから話を聞くうちに、アメリカにあこがれをもつようになりました。

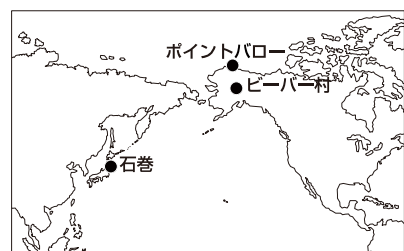
恭輔は、十九歳のとき、見習い船員となって、サンフランシスコに渡りました。恭輔はフランク安田と名前を変え、農場や化粧品会社で働きましたが、三年後には、また船に乗ることになりました。フランクの乗った船は、アラスカの海岸沿いをパトロールしながら密漁船などを取り締まったり、イヌイットの村に食料などの援助物資を運んだりするのが仕事でした。



生肉を食べるフランク安田

あるとき、フランクは船長の命令で気象観測員としてポイントバローで船を降りることになりました。そこは、アラスカの最も北にあり、北極海に面したとても寒い村でした。クジラなどの海の動物をとって暮らしているイヌイットが五百人ほど住んでいて、ほかには商売をしていたアメリカ人が、数人住んでいるだけでした。イヌイットは、ほかの人種とは簡単に仲良くなれないといわれていましたが、フランクは何回か訪問しているうちに仲間に入れてもらうことができました。日本人の顔がイヌイットに、よく似ていたこととフランクが生肉を平気で食べたことが、その理由でした。かれらは、フランクのことをジャパンという種族のイヌイットだと思いました。

ここで暮らすことを決めたフランクは、言葉を覚え、狩猟の腕をみがきました。やがて、腕のいい優秀な若者として、多くのイヌイットから認められるように



密漁船：許可なく動物や魚介類をとる人（密猟者）が利用している船。

イヌイット：北極圏に住む原住民をエスキモー。カナダでは、イヌイットと呼んでいる。

種族：言葉や文化などの共通のものをもつ民族。

なりました。そして、村で一番大きな狩猟グループの親方の娘ネビロと仲良くなり、結婚しました。

このころからポイントバローでは白人の密猟などが原因で、クジラやアザラシなどの海の動物が捕れなくなり、イヌイットは暮らさに困るようになりました。その上、はしかが流行したため、たくさんの人が次々と亡くなりました。困った村人たちはフランクに助けを求めました。たのもしい若者で、英語も話せるフランクに大きな期待を寄せたのです。はしかで亡くなる人が百人を超え、ついに自分の幼い娘までもが、命を落としてしまいました。どうしたらいいか当てのないフランクは困ってしまいました。

そんなある日、フランクはアラスカで金を探するためにポイントバローにやってきたカーターというアメリカ人と出会いました。山分けするからいっしょに金探しをしないかというカーターに強く誘われましたが、決心がつきませんでした。金探しのことは何もわからなかったし、カーターが信用できるかどうかとも不安だったからです。

その一方で、フランクは、次々と亡くなっていく仲間や家族のことを考えると、何とかしなければという思いがどんどん高まっていくのでした。

「イヌイットが生きていくためには、動物が必要だ。海がだめなら山に住もう。

そのためには場所を探すこととお金を手に入れることが必要だ。」

フランクはカーターにかけてみることにし、ネビロに言いました。

「おれは、カーターといっしょに金を探しに行く。君は村で待っていてくれ。」

すると、ネビロが言いました。

「いいえ、わたしも行きます。わたしもいっしょに金を探します。」

間もなく、ネビロを加えた三人は、アラスカの内陸部に入って行きました。当てのない金探しは三年が過ぎ、二人の間には女の子が生まれました。

ある日のこと、フランクはテントのそばに置いてあった草の束にキラキラ光る砂粒



フランク安田(左)とトム・カーター

はしか：  
五・六歳の幼児が  
かかりやすい発熱  
などが伴う伝染病  
「ましん」ともいう。

を見つけてさげびました。

「ネビロ、これだ。これは間違いなく砂金だ。この草の束をどこから持ってきたんだ。」

ネビロに案内された小川の底には、ピカピカと光るおびただしいほどの砂金の粒がありました。カーターはこの場所をシャンダラー鉾山と名づけて金を掘り始めました。フランクは約束どおり大金を分けてもらい、ポイントバローにもどりました。そして、フランクは村人にこう言いました。

「ユーコン河のほとりに、いい場所が見つかった。魚はとれるし、ビーバーがたくさんいて毛皮は高く売れる。ヘラジカやトナカイ、キツネ、クマ、オオカミもいる。獲物には不自由しない。また、シャンダラー鉾山の近くなので、運送の仕事もある。しかし、いいことばかりではない。クジラやアザラシがいるわけではないし、インディアンとのトラブルもあるかもしれない。それでも行きたいという人はついて来てほしい。」

村人の意見は半々に分かれました。移住に賛成したのは若い人たちでした。先に移住した人の様子を見てから考える人もいました。

ポイントバローからのイヌイットが約百人、金探しの途中で出会ったイヌイットが約百人、合わせて約二百人を連れての大移住となりました。食料や水、生活用品などを犬ぞりに積み、長い隊列が進みました。フランクはみんなをばげましながら雪と氷におおわれた二千メートル級の山々が連なるブルックス山脈を越え、八百キロメートルもの距離を進んだのでした。この旅でイヌイットの人たちを苦しめたのは、木のおいででした。

ポイントバローには樹木がなく、なおに慣れていなかったために、大人も子どももばたばたと倒れてしまいました。なおに慣れるため三日間も休憩しなければなりません。二百人もイヌイットを目的地に連れて行くという大変な仕事のほかに、フランクにはもう一つの難しい問題がありました。村を作ろうとしている場所が、インディアンの縄張りの近くにあるため、どうしても許可をもらう必要があったのです。



高い山々をこえる  
イヌイットたち

砂金：  
金のつぶ。風化や浸食などによって金がつぶ状になったもの。

インディアン：  
もともとその土地に住んでいた人たち。  
北アメリカ大陸の原住民。

フランクは、金探しの途中で知り合った日本人で、インディアンと仲がいいジョージ大島に頼んで、話し合いの場をつくってもらいました。たぐさんのおくり物を持ってインディアン（インディアンの首長）の酋長と向き合いました。フランクは、イヌイットの大酋長の役になって必死に交渉したのです。ここで失敗すると、さらに別の場所を探して当てのない旅を続けなければならなくなるからです。ジョージ大島の働きと、フランクの堂々とした態度によって、とうとう移住を許してもらうことができました。その夜、フランクはネビロと二人、夜空にきらめくオーロラをじっと見上げていました。



ビーバー村のオーロラ

こうして、フランクに連れられて長い長い旅を続けてきた二百人ものイヌイットは、ユーコン河のほとりのフランクが用意した家に入って、新しい生活を始めました。フランクは、カーターから渡された大金をおしげもなく村づくりに使いました。フランクは、この村をビーバー村と名づけました。

昭和三十三年（一九五八）年、ジャパニーズモーセ、アラスカのサンタクロースといわれたフランク安田は日本にもどることなく、九十歳で亡くなりました。イヌイットのために尽くした一生でした。平成元年（一九八九）年にアラスカの州議会は、フランク安田の偉大な業績をたたえる表彰を行いました。

また、今でも、石巻市とアラスカ州のビーバー村の交流が継続されています。

## フランク安田

フランク安田（安田恭輔）は、明治元（一八六八）年、石巻（いしのまき）に生まれた。後にアメリカに渡り、全滅寸前の二百人ものイヌイットの移住を成功させ、ビーバー村を作った。フランクは「ジャパニーズモーセ」、「アラスカのサンタクロース」と呼ばれ、平成元年（一九八九）年、アラスカ州議会はその業績を称え表彰を行った。

モーセ：  
古代イスラエルの  
民族指導者。  
モーセともいう。